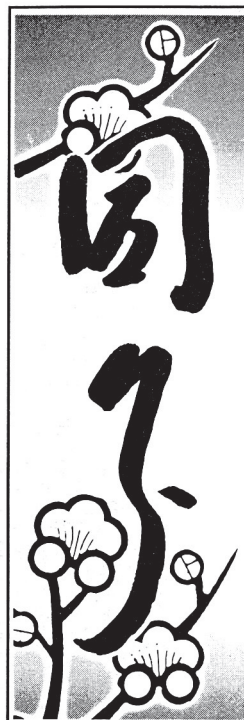




玉鳳院授戒会にて奉詠する詠讚師の先生達



平成14年1月15日  
 第18号  
 発行 梅花流師範・詠範の会  
 会長 柴田弘一  
 題字 初代会長 故加藤信三老師  
 梅花流師範・詠範の会事務局  
 五城目町 待月院 嶋森憲雄  
 電話 (0188-52-9566)

# おとなえするよろこびを

秋田県梅花流師範・詠範の会

会長 柴田弘一

平成十三年の十月末、能代市常盤とぎわの玉鳳院ぎよくほういん様（柳川浩二御住職）で、お授戒会じゆかいえが開かれました。

その折り、戒師じゆかいし禅師さま（大本山総持寺貫首・板橋興宗大禅師）にお目にかかる機会を得ました。そのときのお話の中で、「梅花流の讃歌はいいものだなあ。哀調を帯びたメロディは心の琴線にふれてなんとも言えず、自然に心がはずまっっていくものですね。こんなにいいものを、もっと沢山の方々がこころざされたらなあ、と思うのですが。ともかく皆さんのお唱えをゆっくり聞かせていただきたいですね」と、おっしゃいました。

やがて法要がはじまり、禅師さまが法堂へお出ましになりました。緊張しながらも詠讚師と参加者が一体となつてのお唱えにジツと耳を傾けておられる禅師さまは……。

おとなえする法悦（よろこび）を感じたひとときでありました。「つたえようこのよろこびを」をテーマに梅花流創立五十周年を迎える今年。一人でも多くの方に梅花流の良さを伝え、呼びかけして行く年にして参りましょう。



梅花

# ちよつとぶじよほう

つれづれ

## 男鹿市 大竜寺副住職 三浦賢翁



1990年11月 東西靈性交流 於大本山永平寺

私が本山安居中、永平寺を会場に東西靈性交流会がありました。ヨーロッパとアジアの宗教者が、お互いの教会・寺院を訪れ見学し、宗教者としての意見を交換するものです。その時、オランダの修道院から訪れていたエリザベータさんとはその後も交流があり、数年後彼女の修道院を訪

ねることとなりました。

戦争で主人を亡くされて以来、五十年住んでいるその修道尼寺院には、開かれた当初五十人のシスターがいたそうですが、私が訪れた時には二十四人に減っていました。五十年のあいだ顔おれは変わらなず、ただ亡くなる人がいるため、年毎に自然に減少するのみです。そしていつか残っ

た人員で運営ができなくなった時、新しい修道尼さん方にすべて明け渡すという事です。

私は、週末のミサに訪れる人たちのためのゲストルームに一週間宿泊させていただき、ミサにも塔袈裟姿で参加させていただきました。田園のなかにあるそのヨーロッパの建物には趣があり、すばらしい庭園もありました。シスター方も非常に明るい印象を受けました。

この修道院で一番印象深かったのは、カーペット敷の二十畳程の部屋に、日本とまったく同じ座蒲が並べられ、線香の焚かれた坐禅堂があったことです。全員が七十歳以上のお婆さんが住むこの修道院で、いいものは他の宗教からでも取り入れるという柔軟で熱心な体制に感心させられました。

曹洞宗が他宗派の御詠歌を取り入れ発展させた梅花も、今では北米などに渡り英語にも訳されています。いいものは取り入れ発展させる姿勢は宗門にもあります。今後世界に広まるのが期待されます。

ところで、米国とアフガニスタンの問題ですが、根の深い問題でたやすくは解決されないでしょうが、米

国のしている事に私は反対です。かといってタリバンの味方でもありませんが、イスラム自体は生活の知恵がたくさん詰まった素晴らしい宗教だと思えます。

宗教が人間をより良く活かす為のものであれば、われわれ宗教者は、文化・言語が違ってても、社会体制が違ってても、他宗教の人々とも仲良くやっていける手本を示さなければいけないと思います。

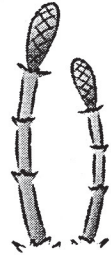
エリザベータさんは「たとえ違う宗教を信じていても人間には共通のものがある。人々は時として何か偉大な力に包まれている感覚を覚える事がある。それがある人は神、または仏、またある時はアラと呼ぶのではないか。祈る人の心は皆一緒。どんなことあっても争いはもうたくさん」と言っていました。

最後に、これから寒くなり空気が乾燥してきます。声の調子が良くないこともあるでしょう。緊張で失敗する事もあるかもしれません。けれど仏様は、そのお唱えが心からのものであることを受け取ってくださいます。どうか安心してご研鑽されますようお願い申し上げます。



みんなの  
つどい

# おらうほの梅花講



山し寺  
田う雲  
つ月と洞

住所 北秋田郡田代町山田  
設立 昭和三十一年十一月  
講長 嵩 仁芳  
講員 六十二名

平成六年九月。梅花講の奉詠大会が当町で行われることになり、方丈様から「おばあさん達と一緒に登壇したら？」と声をかけられました。昭和三十年以来、ずっと生き甲斐のようにご詠歌を唱えてきたばあさん（姑）方とくらべて、お寺に縁のなかつた私たちは、不安でいっぱいでした。でもアドバイスしてくれる大先輩がいるからと安易な気持ちで習いはじめ、二代目講員として登壇し、それがいまの講結成の運びとなりました。

毎月二回、お寺での練習では先生の教えに没頭し、毎年の受検。いまでは全員水色の房をそろえるまでになり、講員みんなの熱心さには感銘しているところです。

私たちのお寺での出番は、お葬式はもちろん、春彼岸、お盆、施食会など年中行事にはいつもご詠歌を奉詠しています。二月十五日のお涅槃には、境内にしつらえた手作り雪灯籠三百個にあかりをともし、地域の子供たちといっしょにおつとめをしています。また平成十二年の十月、方丈様の晋山式の折りには、三宝御和讃を行列にてお唱えし、緊張と嬉しさで胸がいっぱいでした。

年に一度は、先生のお寺（鷹巣町龍泉寺）の講員さんたちと交流会を開いています。タケノコ汁、キリタンボ鍋と自慢料理と一緒に、にぎやかな語らいと楽しい演芸の出し合いで、交歓のひとつときを過ごしています。

今年の春には、私たちの檀信徒地域から、新しく十名を越える講員が誕生し、この秋の交流会はとても盛大な大宴会となりま

した。

こうして、梅花でめぐりあえたおかげで、仏さまの教え、心のふれあい、仲間の大切さ、いのちの尊さを知ることが出来たことに、心から感謝し、合掌したいと思います。

今年の高祖様の大遠忌には、大本山に参拝しようとして、講員一同、心待ちにしているところです。

紹介者 講員 安部玲子



晋山式行列に出番を待つ

受話器から聞こえる梅花のこゝろへ

## テレビホン梅花

☎〇一八八七三三七七六

- 一月 五日 伝心
  - 二月 二日 涅槃和讃
  - 三月 二日 三宝和讃
  - 四月 六日 歡喜(一)
  - 五月 四日 学道
  - 六月 六日 歡喜(二)
  - 七月 二日 聖号
  - 八月 二日 法灯(太祖)
  - 九月 九日 不滅
  - 十月 九日 修正義和讃
  - 十一月 二日 伝心
  - 十二月 二日 紫雲(高祖)
  - 一月 二日 歡喜(一)
  - 二月 二日 歡喜(二)
  - 三月 二日 花供養和讃
  - 四月 二日 供花
  - 五月 四日 慕古
  - 六月 二日 開山忌和讃
  - 七月 二日 真水
- ※ご意見、ご感想をお寄せ下さい。
- 010-0111 秋田市金足岩瀬字前山三  
東泉寺(〇一八八七三三七七五)



経 図 で つ づ る

# 道元禅師

## ものがたい

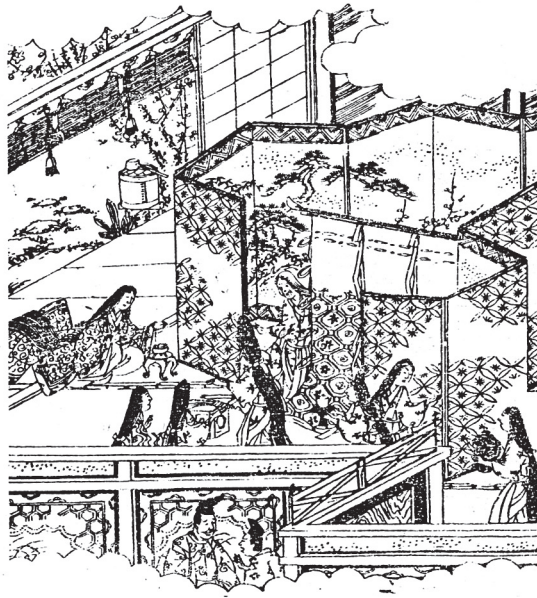
平成十四年は、道元さまがお亡くなりになって七十五年の大遠忌にあたる記念すべき年です。そこでこの一年、曹洞宗に伝わる古い絵図によって道元さまのご生涯をたどってみることにしましょう。

### 1 誕生

大河ドラマでおなじみの牛若丸こと源義経（みなものよしつね）をご存知の方は多いでしょう。義経の兄、源頼朝（みなもとのもりとも）が、それまでの貴族政治をうちやぶり、新しく武士による政権を開いたのが鎌倉幕府のはじまりでした。その頼朝の亡くなった翌年、正治二年（一一二〇）に、京都の公家（くげ）朝廷に仕える家臣の子供としてお生まれになったのが道元さまです。たがいに覇権（はけん）を握ろうとする武家たちの争い、くすぶる公家たちの反感。世の中にはまだまだ血なまぐさい争いの臭いがただよっていた時代でした。絵図は、見るからに格式高いお屋敷と思われる一部屋で、女官たちの仕えるなか、屏風（びょうぶ）のかけで道元さまが産声を上げられた場面を描いています。公家のお生まれではありますが、道元さまご自身は、

生涯ご自分の出自や家系のことについては、まったく人に語ることがありませんでした。高貴な生まれのことをほこらしげに口にするような方ではなかったのです。幼年時代の道元さまは、たいへん聡明（そうめい）な子供で、中国の詩文や儒教（じゅきょう）の書などを好んで読んでいたと言われます。

祖師 御誕生



### 2 無常

道元さまのお母様は、道元さまが八歳の時に亡くなったと伝えられます。絵図に描かれているのは目を閉じたお母様の亡きがらを前に、立ちのぼる香炉の煙を指さしている幼い道元さまの姿です。詞書（ことばがき）には「御母君の喪にあいて、香火の煙を観じて無常を悟りたまう」とあります。お母様の死の枕辺に、人の世のはかなさに深く感じ入り、仏の道を志されたと言われます。

後年、道場を開かれた道元さまのところへ、教えを求

### ◎ 道元さまのこゝろ

☆この絵図はいつのもの？☆  
江戸時代のもので、今から二百年ほど前、面山（めんざん）という大  
学者として名高い和尚さまが、道元  
さまの詳しい伝記を本にまとめまし  
た。この絵図はその伝記のさし絵と  
して描かれたものです。

☆一つの目の中に二つの瞳！☆  
言い伝えでは、道元さまは生まれ  
時、ひとつの目に二つの瞳があり、  
神童の人相だと言われました。その  
ためか、幼くしてたいへん難解な学  
問書を読破したという逸話が伝えら  
れています。

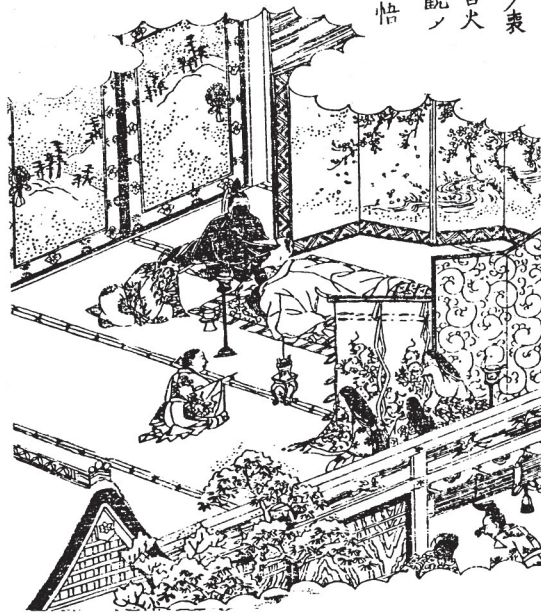
### ☆道元さまのこゝろ親☆

これまでの言い伝えでは、お父様は  
久我通親（こがみちちか）、お母様  
は藤原基房（ふじわらもとふさ）の  
娘ではないかとされてきましたが、  
近年の歴史研究では必ずしもそう断  
定できず、ほかの人である可能性も  
言われています。いずれにしても高  
貴な生まれということはまちがいな  
いようです。道元さまご自身が何も  
ふれていないということは、このこ  
とについて私たちが詮索することを  
こぼんでいるようにも思われます。



めて多くの修行者がやってきました。その中に、自分が出家すると、家に年老いた母親を置き去りにしなければならず、そのことで悩んでいる若者がいました。道元さまはその時、母親を思う若者の気持ちにたわり、それでも熱心に仏の道を求めることの尊さをさとししました。母親への愛情をのりこえ、強く道を求めることを勧める道元さまのひたむきなお心は、こうした幼年時代の悲しい経験がもとになっているのかもしれない。

御母君ノ衆  
ニ遇テ香火  
ノ煙ヲ觀メ  
無常ヲ悟  
リ玉フ



3 出家

お母様との死別もきっかけになったのでしようか、十代の頃の道元さまは仏教書に親しまれるようになりまし。武家達はいまだ謀反や戦乱のさわめきの中にあり、公家たちはそれぞれの栄華の道を追い求め、みにくいばかりごとをめぐらす、世の中はいまだそんな不穏な空気に包まれていました。しかし道元さまが読みふけた仏

教書の中には、みにくいこの世のようすとはまったく違って、人間の正しい心のあり方が解き明かされ、世界のことわりが力強く説き示されているのでした。

そんな仏教へのあこがれもあったのでしよう、十三歳の春、道元さまは母方の叔父である天台宗のお坊さん、良観さまを訪ね、出家の決意を打ち明け、比叡山（ひえいざん）に登り、翌年には天台宗の授戒を受け、正式にお坊さんとなりました。道元さまの親族達は、出家には必ずしも賛成ではなく、むしろ家にとどまって朝廷に仕える道を望む声が多かったのです。絵図の道元さまは、人目を忍んでひとり比叡山への山道を急いでいます。

その頃の比叡山は、天台宗の総本山として、さらには日本仏教の総合学問書として、また全国の仏教者の登竜門として勢い盛んなものがありました。しかし一方では貴族の子弟たちの出家者も多く、世俗の世界と同じように、僧界での栄達を目指そうとする人たちもいました。



浴ヲシニヒ  
出テ木幡  
ノ山莊ヲ  
經テ叡山  
へ赴セシ  
ル



人は生まれではなく、その行ないこそがすべてであると教えてくださっているのではないでしようか。

★お母さんの遺言★

道元さまの出家の志を告げられた良観さまは、元服（げんぶく）を間近に控えて家を出るなんてとんでもないと、驚いてその思いをとどめさせようとした。しかし道元さまは「私に出家せよというのは亡くなった母の遺言だったので」と打ち明けられました。臨終の時に「おまえは出家学道して私の来世を弔って下さい」と、お母さんは道元さまに話していたのでした。

★ニヤカとダルマの出家★

お釈迦様はインドの小国カピラバストウという国の王子でした。またダルマ大師も香至国という国の王子でした。二人とも王家の身分を捨ててひとりのお坊さんとして出家されたのです。道元さまはこのことを『正法眼蔵出家功德（しょうぼうげんそうしゅつけくとく）』というご本の中で、世俗的な栄華よりも仏の道を選んだとすばらしいこと、と称賛されています。きっとご自分の出家についても同じようなお気持ちを抱かれたのではないでしようか。



梅 花 流

# 講師一泊研修会のおもいで

長谷寺(本荘市)会場 十月十七・十八日

秋田市

円通寺講師 伊藤慶子

どんよりと曇った空からは、大粒の雨。予定よりかなり早く着き、境内はまだ静まりかえっていました。それが故に二丈六尺の観音様を奉る観音堂の厳かさ、雄大さが、いっそう強く感じられました。観音堂を御参りし、是山和尚様の舍利殿、最後に是山和尚様のお墓を御参り致してから、静かに会の始まりを待つておりました。参加者は、百名は越えているように思われました。

第一日目、全体講習を終え、午後から四つの班(階級別なし)に分かれて講習、五時、観音堂(大仏様)にての法要に入りました。

見わたせば功德の海によせかえす  
ひとつひとつの波のきらめき

禅林寺方丈様の浄光の独詠。透き通ったお声が観音堂の隅々まで響きわたりました。ほんとうに素晴らしく、あの情景を思い浮かべたに、背筋が寒くなるような感激を覚えます。

夕食を頂き、温泉へ。同行同修でのお風呂は、心身共に安らぎを感じました。一日目最後の講習会は、長谷寺の方丈様。湯上がりということをお気遣い下さり、肩のこらないリラックスされた講習会で、笑いの中にも良く理解することが出来楽しく思われました。

二日目は、秋晴れの良い天気。坐禅、朝課、般若心経に始まり、正法、追善供養御和讃。長谷寺講師様のお仕度下さった朝食と、方丈様が東京からお取り寄せ下さった

た昆布の佃煮をいただきました。  
分科会を終え、観音堂(大仏様)にて全体講習。四班それぞれが観音様の御前に登壇し、観世音菩薩の御和讃と御詠歌をお唱え致しました。昭和五十九年から梅花を始め、一泊講習会には何回か参加させていただいて居りますが、赤田の大仏、長谷寺様ならではの、観音様の御前にての講習会は、本当に深い感激を受けました。生涯忘れる事の出来ない思い出です。



由利町

禅林寺講師 三浦仲子

親戚の葬儀に出席した時にお唱えしてくれた梅花講の皆様のならず鈴の何ともいえない響きに心惹かれ入講してから早九年になりました。

朝から雨の降る肌寒い中、昨年も確か雨だった事を思い出しながら、赤田の大仏様で知られる長谷寺様の一泊講習へと向かいました。

一日目開講式の後、全体講習、各班に分かれての分科会、師範の先生方の教え方も、ただ難しいだけでなく、ユーモアも交えながら、わかりやすく教えて頂き楽しく、時間のたつのがとても早く感じられました。完全におぼえる事は出来なくとも少しでも上達できるように、とは思いますが、奥が深く自分の練習不足を再認識させられました。

夕暮れ間近、観音堂での法要、師範の先生の献詠がおごそかに、感動的に行われました。薬石(夕食)も、ぼろっこのお風呂での入浴後、又全体講習が楽しく終了。車通りも少なく静かな本堂で快眠。

二日目、雨も上がり秋晴れの良い天気に恵まれ、さわやかに坐禅、朝課、分科会と予定をこなしました。



最後の全体講習、観音堂で勉強の成果の発表が各班ごとに、観音様のもとで、それぞれの奉詠。普段の奉詠大会とはひと味違う感激的なものでした。めったに出来ない経験をさ

せて頂き、これも梅花をやっていればこそと感謝しつつ自分の出来る範囲で生涯学習の一つとしてこれからも取り組んでいきたいと思えます。有難うございました。

大龍寺(男鹿市)会場 十一月五日・六日

男鹿市

大龍寺講員 澤木フミ子

紅葉盛りなる季節、私たちの菩提寺、男鹿大龍寺において、梅花流一泊研修会が行われました。

早朝から鐘の音とともにじまる先生方のお経、梅花の鈴の音、心に清々しく響き、涼しく感じました。分科講習では、先生方の熱心な教えや、講員の皆さんの真剣な眼差し、熱意が伝わり、頭の下がる思いがいたしました。

厳肅な中で、たくさんさんのローソクの灯る中、流れるお経の心にしみる感動とありがたさに、講員の皆さんの中からは、すすり泣く声も聞こえていました。 はやくに他界してしまつた夫、先祖のことなどが、無限に脳裏に浮かんで参りました。 梅花流詠讃歌をお唱えする度に、多くのことを学び、私自身、人生の

大きな成長の機会をいただく思いがして、ありがたい気持ちでいっぱいです。

庭園に流れる尺八の音は、何時までも思いでとして、心に深く残ることでしょう。

天王町

自性院講員 鈴木慶子

その日は、朝から曇り空。大龍寺さんの本堂前の紅葉は真っ赤に色づいて、私たちを歓迎しているかのようでした。

開講式。会長の柴田先生は「教典のお誓いには、『私達は』と書いてありますが、『私は』と置き換え、それは自分自身のことと受けとめて下さい」とお話をされました。私もお誓いを心の糧として「毎日穏やかな心でいられるといいなあ」と思いました。

午後は、分科会。私はどこを勉強してもおぼつかないので、日頃の勉強不足を悔やむばかりでした。

外はもう黄昏です。万灯供養が始まりました。先生方の奉詠をしっかりと体へ受け止め、ローソクにあかりを灯しました。いつも思うことです。が、どうしてもこんなに梅花が心にしみいるのでしょうか。そんな余韻を残して万灯供養は終わりました。

夕食の後、夜の講話は自性院の方丈様でした。方丈様は地元の小学校で尺八を教えているそうです。

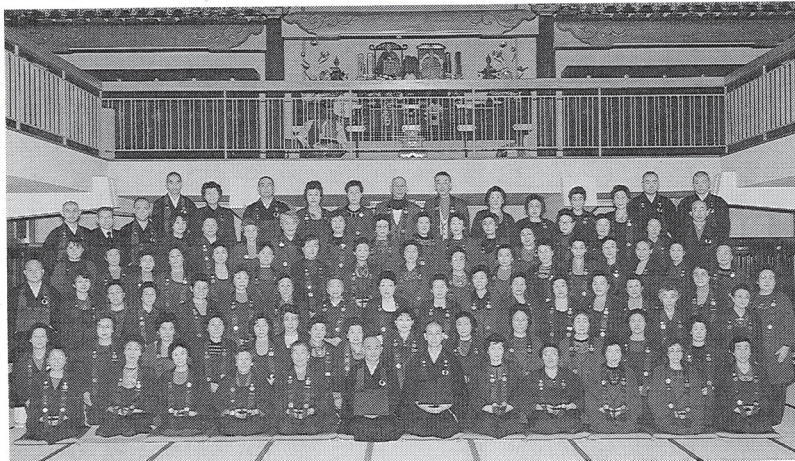
子供達は最初ただ尺八をフーフー吹くだけで、全然音が出なかったそうですが、何とかして教えてあげたくて、お箏(こと)と一緒に教えたらどうか音がでるようになったことや、学習発表会で発表して子供達の一生懸命な姿に感動したことなど、尺八と梅花を交えながらのお話でした。お話の最後に講員さんから「枯れすすきをお願いします」とリクエスト。「ここから先は有料です」とかわされて、爆笑に終わりました。

二日目の全体講習は、恩徳寺の方丈様でしたが、「新しい教典は歌詞が先になっているので、何回

も歌詞を読んでから曲をつけるように」とのお話でした。

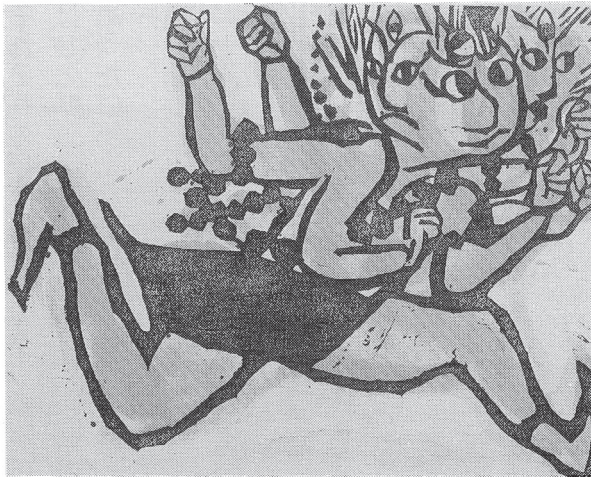
分科会でも先生方からは、丁寧に教えていただき、本当にありがとうございました。

いよいよ閉講式です。同行御和讃をお唱えしてお別れです。同行同修の道に少しでも近づけたらと思いが、また講員の皆様とお会いできることを念じてお別れしました。





### 師範・詠範研修会



**期日** 平成14年2月1日(金)～2日(土)  
**時間** 1日午前9時半受付～2日午後3時  
**会場** 秋田市宗務所・禅センター  
**講師** 宍藤英明一級師範(北海道・禅峯寺)  
**対象** 宗侶・寺族(檀信徒講員は参加できません)  
**宿泊** 秋田市さとみ温泉  
**申込** 1月20日までに  
 師範・詠範の会事務局へ



### 禅センター・梅花講習日程

平成十四年三月までの梅花講習日程をお知らせします。

#### 【檀信徒講習会】

二月七日(一〇時半～一五時)  
 講師 小野碩英師 伊藤道人師  
 課題 不滅 報恩供養  
 三月八日(一〇時半～一五時)

#### 【宗侶・寺族研修会】

二月一五日(一〇時半～一五時半)  
 講師 柳川浩二師  
 課題 特別所作の曲 紫雲等  
 ※内容はいずれも詠唱、作法、歌詞解説など。受講は無料、初心者も歓迎です。昼食は各自ご持参願います。  
 会場 秋田市宗務所・禅センター  
 でんわ 〇一八八六八八七二

講師 保坂春聴師 亀谷隆道師  
 課題 彼岸 道交

### 報恩大授戒会修行



秋田県宗務所では平成十四年、高祖道元禅師七五〇回大遠忌を記念して、報恩大授戒会を修行することになりました。お授戒(じゅかい)とは、五日間にわたって、和尚さまたちと一緒に、みほとけのご修行にはげみ、戒師様のご証明によって、みほとけとして生まれかわり、お血脈をいただく、宗門では最も尊い法要です。

主催は秋田県宗務所、協賛は管内全寺院と秋田県曹洞宗青年会です。日ごろから、梅花を通じてほとけの教え親しまれ、曹洞宗の行事にご協力いただいている梅花流講員の皆様にもつつしんでご案内いたします。

戒師 曹洞宗大本山総持寺  
 貫首 板橋興宗大禅師

期日 六月三日啓建 七日完戒  
 戒場 補陀寺(秋田市松原)

くわしい内容についてはそれぞれの菩提寺へおたずね下さい。またお申し込みも各菩提寺を通じて宗務所へお届け下さい。



### バッジの位置はいいですか？

檀信徒講員の皆さん、ご自分の梅花流輪絡子(ばいかりゅうわらくす)のバッジの位置を確認してみましよう。奉詠大会や検定会の時に、あれ、おかしいな? と目に付く方がたまにいますよ。

講員章は向かって右側、教階章は向かって左側につけます。それぞれ上の梅花紋よりも約一センチ上の方へはなしてつきます。ときどき自分の受けてきた教階全部の教階章をつけている方がありますが、それはまちがいです。教階章は現教階の教階章を一つつけます。バッジの梅の花紋の向きにも注意しましょう。

